

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 阿部 幸信

中国古代の印綬をめぐる問題は、志賀島出土の金印をあげるまでもなく、我が国の古代史をもまきこんだ重要テーマである。論文提出者は、この問題を検討するにあたり、印と綬の機能をわけ、綬が朝位や葬送の格式を決定していることを明らかにし、その上で、王莽時期におこった印と綬の分離、すなわち印が示す官秩と綬による序列の不一致の意味するところを究明して、官制改革の推移をまとめなおすことに成功している。綬の序列には、理念的に回顧整備された周制がかかわる。この点に、色の序列を決めるその方法の解明作業をからめ、みずからの推論を強化している。理念的周制が中央と地方を分ける封建擬制の建前をもつだけでなく、両者を中央の下に統合して説明するする役割を担っていたとする推論は、印が華夷思想、綬が徳化思想と結びつき、いわゆる東アジア冊封体制の下で、前者が内外の分離を、後者が統合を表現したのではないかというさらなる推論に結びつく。

なお、論旨には関わらぬとはいえ、一部推論のいきすぎを指摘された箇所もないではない。しかし、限られた史料事情の下、検討の進め方はきわめて堅実であり、中国古代史研究を新たな段階に進めた点は、高く評価できる。よって、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。